

令和4年度 外部評価懇談会議事録

○日 時 令和4年9月15日 10:00～12:00

○会 場 オンライン (Teams) 開催

○内 容 「DP再考と可視化について」

○出席者 (外部評価委員)

菊池重雄氏 (玉川大学 名誉教授・特任教授)

川島啓二氏 (京都産業大学 共通教育推進機構客員教授・初年次教育センター長)

杉谷祐美子氏 (青山学院大学 教育人間科学部教育学科教授)

(本学)

島田昌和学院長・理事長、島田燐子名誉学院長、櫻井隆学長

福井勉副学長 (教学担当・内部質保証委員長)、亀川雅人副学長、恒吉僚子副学長

上村佳世子副学長、鶴浦裕外国語学部長、新田都志子経営学部長、

椛島香代人間学部長、神作一実保健医療技術学部長、

喜多見康経営学研究科委員長、甲斐田万智子外国語学研究科委員長代行、

小栗俊之人間学研究科委員長、川良徳弘保健医療科学研究科委員長、

横田素美看護学研究科委員長、小林剛史 GCI センター長・総合研究所長、

西方浩一教務部長、飯島史朗学生部長、木村浩則学長補佐、藤谷克己学長補佐、

各学部教務委員長 (池田芳彦教授、金彦叔教授、文野洋准教授、中俣修准教授)

絹川直良全学教養教育委員長、馬渡一浩大学ブランディング委員長・広報委員長、

竹内秀和副理事長・法人事務局長、

森村幸夫統括ディレクター・本郷キャンパスディレクター、

中島弘高ふじみ野キャンパスディレクター、森岡俊也顧問、橋本博幸法人総務部長、

吉村郁夫キャンパスディレクター補佐、木下直人キャンパスディレクター補佐、

角田千春キャンパスディレクター補佐、

田中綾子キャンパスディレクター補佐兼戦略企画・IR 推進室長、三俣正治学生支援センター

長、五十嵐康雄学生支援センター長、岩坪充雄学生支援センター長補佐、

田中真由美教職課程センターマネジャー、

田中孝祐 GSI グループマネジャー、佐々木稔教務マネジャー、

須永清美教務マネジャー、石井賢一郎社会教育マネジャー、星野樹教務マネジャー、

中村光昭教務マネジャー、山下和宏教務マネジャー (記録)

1. 挨拶・進行方法説明 (副学長 福井 勉)

昨年度の外部評価懇談会については入試と教学データに基づいた分析を行ったが、その中で学生層や時代ニーズの変化に伴うディプロマポリシー (以下 DP) の意味、また、評価のパロメーターについて問題提起がなされた。その問題提起に基づき、本年のテーマは「DP

再考と可視化について」を見直すためのものとし、内外の関係者に問い、新しい DP 策定に結び付けていく指針が発表された。各学部、大学全体の DP 策定順に従い、各学部の再検討された DP に基づき、大学全体の DP の見直しを行っていくこととしたい旨も発言された。

【確認事項】

ディプロマポリシーの考え方

下記の大学教育理念・目標に基づき、各学部の教育理念・目標を策定、最終的な DP 策定につなげる。また、再考にあたっては DP 可視化のポイントを踏まえることとする。

・ 現行の大学の教育理念・目標

建学の精神である『自立と共生』の理念をよく理解し、校訓である「誠実」「勤勉」「仁愛」を実現し、グローバル社会に通用する「学士」の学位にふさわしい、幅広い教養と、実務社会の要請に適う技能を身に付けて社会に貢献できる人材を育成することを目標とします。したがって、本学では以下の能力を身に付けた者に文京学院大学の「学士」を授与する方針です。

1. 建学の精神および校訓に基づいて自己を確立し、多様な背景をもつ他者に共感的にかかわり社会に貢献することができる
2. 幅広い教養と専門分野における知識・技能を身につけ、それに基づいて自己を表現し、他者と意見交換ができる
3. 環境の変化に応じ柔軟に考え、問題を発見してチームで協働して情報を収集し、その課題の解決に向け努力することができる
4. 自らの目標をもち、それを達成するために考え主体的に学習することができる

・ DP 可視化のポイントは下記のとおり

1. 知識・理解
2. 汎用的技能
3. 態度・志向性
4. 総合的な学習経験と創造的思考

2. 各学部からの報告

[1]外国語学部（金彦叔教務委員長）

資料に基づき、外国語学部のディプロマポリシーの再考案が報告された。

基本情報

外国語学部 1 学科 2 専攻

英語コミュニケーション学科 国際ビジネスコミュニケーション専攻

国際教養コミュニケーション専攻

現在の DP の報告および現行 DP に基づいた検討内容が報告された。現在の大学の教育理念・目標に基づき、外国語学部では「多様性と変化に対応する人材を育成」することをテーマに、下記のとおり新たな DP を検討している。() 内は可視化のポイントを当てはめたものである。

- 1) 国際コミュニケーションの場面で英語を活用する力 (1. 知識・理解)

- 2) 複言語及び複文化的視点から考える力 (1. 知識・理解)
 - 3) 複雑で多様な社会で課題を発見し解決する力 (2. 汎用的技能、4. 総合的な学習経験と創造的思考)
 - 4) 他者を理解し主体的に発信する力 (3. 態度・志向性)
 - 5) 地球市民として国際及び地域コミュニティに貢献する力 (3. 態度・志向性)
- ※2) の補足として、複言語及び複文化に関して自分自身が多様化の中の 1 人の主人公であり、一人一人が多様な言語や文化を理解するという意味がある旨が説明された。

また、併せて現在外国語学部で行われている学部改革の現状報告もなされ、下記のような改革案が提示された。

人材育成の方針

- 1) 英語の活用能力
- 2) 複言語・複文化的視点
- 3) 課題発見解決能力
- 4) コミュニケーション・発信力
- 5) 社会貢献力

DP 実現のための 4 大改革

- 1) 国内留学 (LUJ 連携プログラム)
- 2) 英語の動機付け (ESP, Speaking8)
- 3) PBL 型の授業の充実 (全学年参加可能な FW 及びゼミ導入)
- 4) キャリア教育の充実 (インターンシップ拡充)

それぞれのプログラムが個人に応じたものであり、これらを通じて全学生のグローバル体験を可能にするものであることが報告された。

[2]経営学部 (池田芳彦教務委員長)

資料に基づき、経営学部のディプロマポリシーの再考案が報告された。

基本情報

経営学部 2023 年度より 2 学科制に移行

経営コミュニケーション学科

マーケティング・デザイン学科

2018 年度からカリキュラム変更を検討し、具体的に 2021 年度に 2023 年度において 2 学科へ改組することが決定、本格的な準備をはじめ、各学科のカリキュラムポリシーの見直しに着手し、併せて学部の DP の再考もなされた。新たな DP の考え方は時代に沿った形でのアップデートを基本的な方針とし、その中でも本学部の特色を生かしたものとすることを念頭に置いて再考された。

従来 1) 知識・理解 2) 思考力 3) 課題解決力 4) 多様性理解の 4 分野に、5) 倫理観を加えた 5 分野への変更をするものとする。

これらの考え方に基づいた経営学部において再考された DP は下記のとおりである。

() 内は現行の大学全体 DP を当てはめたものである。

1) 知識・理解

経営学や各専門分野における基礎から発展的な知識・技能まで体系的に理解し、具体的に身に付け、実際の経営活動へ応用できる。

2) 創造的思考力

洞察、観察、共感、分析、実践を通じて、時代の変化をいち早く、常に把握する力を身に付けると同時に、情報や知識を論理的・統合的に分析できる。(大学 DP 2, 3)

3) 課題解決力

自らの課題を設定し、解決に必要な情報を収集・分析・整理でき、常に失敗を恐れずに解決困難な課題に対しても挑戦できるマインドを持つことができる。(大学 DP 3, 4)

4) 多様性の理解

グローバル社会で、多様な他者に対する想像力を持ち、他者と強調・協働して行動できる。また、自らの考えを対話し、共有し、目標実現のために他者に働きかけることができるコミュニケーション能力がある。(大学 DP 1)

5) 地球市民としての倫理観の醸成

自然界の制約や人間の本質、社会正義を理解し、社会の一員として、良き社会の発展のために貢献する意識を身につけている。

DP 到達度のアセスメントについても下記のとおり報告された。

12 項目の学生自己評価+教員評価 (4 段階+単位数・GPA) の原則の下、上記 5 項目の DP が 12 項目の指標との結びつきが下記のとおり示された。

知識・理解 = 1. 情報リテラシー、2. 教養と理解

創造的思考力 = 6. 論理的思考力

課題解決力 = 4. 発表力、5. 伝達力、7. リーダーシップ、10. 問題解決力

多様性理解 = 3. 他者理解、9. 調和力、12. チームワーク

倫理観 = 8. 倫理観、11. 自己管理力

DP 到達度の可視化については、セールスフォースのポートフォリオ機能を用いて、学生の評価を教員が確認・評価する仕組みで運用していることが報告された。

2 学科制に伴い、下記のとおり各学科の DP も策定されたことが報告された。

なお、アセスメントについては、各分野科目ごとの到達度と照らし合わせて可視化する。

1) 経営コミュニケーション学科 DP

DP1 (共通) : 基礎的専門知識学科の科目分野 (経営・会計・関連分野) の基礎的な知識を理解し、他者に対して説明することができる

DP2 (共通) 問題解決能力 : マネジメントの実践に必要な基本的な理論や技能を実際の組織

活動や社会における課題解決に応用することができる

DP3（共通）：多様性理解組織の目的達成に向けて、リーダーシップを発揮し、アイデアを出し合い、お互いにコミュニケーションをとりながら、多様な背景や価値観を持ったチームメンバーと協働することができる

DP4（共通）：知識・理解・思考力持続可能な社会に向けたイノベーションに求められる創造的な発想や柔軟な思考、挑戦マインド、多様なスキル・能力の基礎を身につけている

DP5（経営系）：経営学専門知識応用力持続可能性の視点から現実の世界や社会を客観的に認識し、事業活動や市民生活のさまざまな場面において経営学の基礎的知識を応用し、社会の持続可能な発展や組織の存続・成長に貢献することができる

DP6（会計系）：会計専門知識会計・税務の知識や計算技術を修得し、企業が公表する財務諸表などの会計情報の利用、企業経営上の意思決定等を行うことができる

2) マーケティング・デザイン学科 DP

DP1（共通）：プレゼンテーション能力市場の現象を量的・質的データで把握し、分析し、論理的文章や視覚化などを用いて適切に表現できるスキルを身につけている

DP2（共通）：デザイン思考デザイン思考を用い、トライ&エラーを繰り返しながら新しいものやサービスを創造し、活用できる力を身につけている

DP3（デジタル系）：データ分析能力統計や情報の基礎力を身に付け、分析ソフトやプログラムを用いてデータを的確に解析でき、解析結果を意思決定に活かして、付加価値を生み出すことができる

DP4（マーケティング系）：マーケティング専門知識の応用マーケティングの基礎理論や基本枠組みを体系的に理解し、これを有効活用することができる

DP5（コンテンツ・デザイン系）：デジタルマーケティングスキルコンテンツを構想し、プランニングし、デザインを用いて Web サイトや SNS 等を制作、伝達・発信する新しいマーケティング手法を身につける

[3]人間学部（文野洋教務委員長）

資料に基づき、人間学部のディプロマポリシーの再考案が報告された。

基本情報

人間学部 下記の 4 学科から構成

コミュニケーション社会学科

児童発達学科（国際こどもコース設置：2023 年度）

人間福祉学科

心理学科

人間学部の各学科の編成と教育目標について下記のとおり説明がなされた。特色として、対人援助職・教育職の人材育成のため、協働的活動や実証的アプローチがカリキュラムに設け

られている。

1) コミュニケーション社会学科

共生社会の構築に資する地域づくりのリーダー育成
社会調査（フィールドワーク）による実証的アプローチ

2) 児童発達学科（国際こどもコース設置：2023年度）

乳幼児・児童の最善の利益を図るための専門家の育成
小学校教諭、幼稚園教諭、保育士

3) 人間福祉学科（3コース）

幅広い対人援助専門職の要請および福祉感覚を持つ企業人の育成
社会福祉士、介護福祉士、精神保健福祉士

4) 心理学科（3コース）

心理学に関わる諸問題の解決に寄与する専門性を備えた人材の育成
公認心理師、実験・調査による実証的アプローチ

以上4学科の教育目標に基づき、各学科の現行DPからの改善策と改定案が報告された。

1) コミュニケーション社会学科

学士力に対応し、複数の要素を整理し、簡潔に表現することをポイントとし、DP検討の最重要課題であるアセスメントの観点からどのような指標で評価していくかも意識し下記のとおり再検討した。

1. 人間学・社会学の諸分野の専門的知識、社会問題への洞察力を有する。（知識・理解）
2. 多様な社会を分析するための、コミュニケーション・スキル、情報リテラシー、社会調査スキルを有する。（汎用的技能）
3. 社会課題の解決や新たな社会的価値の創造に向けて、立場の異なる他者と協働しながらプロジェクトを遂行することができる。（態度・思考力）

2) 児童発達学科

2023年度国際こどもコース設置を踏まえ、多様な発達・背景を持つ、子どもへの理解を踏まえ新たに設けることをポイントとし、下記のとおり再検討した。

1. 幅広い教養と専門分野における知識・技能を身につけている。（知識・理解、汎用的技能）
2. 問題を発見し解決に向かって情報収集・思考・判断・表現することができる。（態度・思考力）
3. 個人差、異文化の違いなどを含む多様な他者とかわり、共生することができる。（多様性の理解、共生）
4. 自らの目標や課題、実践を省察し、新たな目標に向かって主体的に学び続けることができる。（課題解決力）

3) 人間福祉学科

複数の情報をまとめ、簡潔に表現することをポイントとし、抽象的表現を具体化し、DP 検討の最重要課題であるアセスメントの観点からどのような指標で評価していくかも意識し下記のとおり再検討した。

1. 自己を確立し、他者と関わり、社会のさまざまな場面で困難に直面している人びとに共感し、対人援助能力（他者と関わる基礎技能・コミュニケーションスキル）を活かして、社会福祉に関連する課題を解決することができる。
2. 社会福祉に関する専門的知識や技術を身に付け、それらを実際の社会におけるさまざまな場面で活用することができる。
3. 職場において互いに専門性を活かして協働するチームのメンバーになるとともに、チームをマネジメントし、リーダーシップを発揮することができる。

4) 心理学科

重複するような表現を集約し、3つの側面をそろえ、抽象的表現を具体化し、DP 検討の最重要課題であるアセスメントの観点からどのような指標で評価していくかも意識し下記のとおり再検討した。

1. 知識・技能
 - ・心理学の諸分野の専門的知識を有する。
 - ・心理学的に現象を分析するスキルを有する。
2. 主体性・協働性
 - ・人の心に関する諸問題を主体的に発見し、解決にあたることができる。
 - ・他者の意見を尊重し、自分の考えを的確に相手に伝えることができる。
 - ・協働して問題解決にとりくむことができる。
3. 自己理解・他者理解
 - ・自己を省察することができる。
 - ・人間の多様性を理解し、受容することができる

最後に、下記のとおり、DP 検討にあたり下記のとおり課題が問題提起された。

1. 育成目標と到達目標の対応・表現の検討（継続）
 - ・育成目標と到達目標との間に整合性があるか。
 - ・各目標に重複がないか、アセスメントが可能な具体的な表現となっているか。
2. アセスメントの測度
 - ・知識・技能については、専門の講義科目や実習・実技科目での査定がある程度可能。
 - ・主体性・協働性・問題解決のスキルをどのように評価するか（演習・実習科目等における授業参加の評価、学生による自己評価の活用方法 etc.）

[4]保健医療技術学部（中俣修委員長）

資料に基づき、保健医療技術学部のディプロマポリシーの再考案が報告された。

基本情報

保健医療技術学部 下記の4学科から構成

理学療法学科

作業療法学科

臨床検査学科

看護学科

まず、DPの再考と学修成果の可視化への取り組みにあたり、下記のスケジュールの下実施されたことが報告された。

2022年5月 大学・学部FDなどによるDP再考にむけた意識共有

6月 DPの再考 DP・AP・CPの整合性の再考学修成果を可視化する評価指標の再考

9月 検討中のDPについての報告 今後大学方針をうけたうえでDP、DP・AP・CPの整合性、学修成果を可視化する評価指標を再検討

資料に基づき、保健医療技術学部の分析結果と対応策が報告された。

各学科ともに大学のDPにおける、共感性、知識・技能、チームでの協働、主体性といったキーワードを意識し再検討することとした。

また、学修成果の可視化も含め、下記のとおり再考した。

1) 『学士力』の4つの要素を踏まえて、現状のDP内容を確認。

4つの要素：1. 知識・理解 2. 汎用的技能 3. 態度・志向性 4. 統合的な学習経験と創造的思考力

2) DPと学修成果を可視化するための評価方法がセットになっているか確認。セットになっていなければ評価方法を検討する、またはDPの修正を検討。

3) DP再考に合わせて3つのポリシーの整合性の確認。整合性がなければ内容を検討。 }

4) DP項目と評価方法の対応を整理

下記改善案

1) 理学療法学科

1. 共感力をもって他者とのコミュニケーションを図ったうえで、自分の考えを表出できる。
2. 理学療法士として必要とされる基本的な知識・技術を有している。
3. 他者と協調し、問題解決に向けた行動ができる。
4. 自ら課題を発見し、主体的に学修することができる

2) 作業療法学科

1. 他者を尊重し、共感性をもってコミュニケーションを図ることができる。
2. 職業人としての常識的態度を身につけ、幅広い教養と作業療法士に必要な基本的知識・技能を修得し、責任感をもって行動できる。
3. 目標達成に向けて他者と協力し合い、建設的に行動することを努力できる。
4. 倫理観を養い、自らの能力を高める努力を惜しまず、新たな課題にチャレンジすることができる。

3) 臨床検査学科

1. 医療人としての倫理観と他者に対する思いやりをもち、責任をもって行動できる。
2. 臨床検査技師として必要とされる基本的な知識・技術を修得し、活用できる。
3. 患者や他の専門職と適切にコミュニケーションする能力をもち、チームの一員として協調して行動できる。
4. 自らの専門分野での課題を見出し、解決に向けて行動できる

4) 看護学科

1. 人間の尊厳を擁護するうえでの課題に気づく倫理的感受性を持つ。
2. 援助的人間関係構築のためのコミュニケーション能力を持つ。
3. 個人、家族および地域社会の人々に対して、専門的知識と技術を用いて、それぞれの健康レベルと個別性に応じた看護を実践できる。
4. 看護専門職としての役割を理解し、関連分野の人々との連携・協働を考えられる。
5. 他者からの評価を謙虚に受け止め、自身の課題を見出し、取り組むことができる

学修成果の可視化については、DPの項目と様々な評価指標とを照らしあわせて行われていることが報告された。特に保健医療技術学部特有のチーム医療論という授業評価が指標に取り込まれていることが強調された。

[5]GCI (小林剛史 GCI センター長)

資料に基づき、GCIにおけるDP設定状況、改訂の予定等について報告がされた。

CGIプログラムは学部学科でディプロマポリシーがある上に伏線このような形で、このディプロマポリシーが成立しているという特殊性をもっており、所属する各学部学科のディプロマポリシーに基づいて、まず各学部の学士の学位が授与されるということを前提にGCIのディプロマポリシーが以下、3つ設定されている。

- 1) グローバル英語のコンプトを理解し、高い英語コミュニケーションスキルを身に付け、国際的な環境で十分なコミュニケーションできる状態。
- 2) 国際的な多様性を理解し、置かれた状況や価値観が異なる人々の協働で成果をあげる

ことの能力

3) 専門分野における知識・技能を身に付け、グローバルな環境で自己を表現し他者と意見交換できる能力

プログラムスタート当初の 2013 年から、それぞれの学部学科の専門性をベースとして、グローバルコミュニケーション能力を身に付けていくことが基本となっており、学生は選抜により決定し、必然的に偏差値水準含め英語能力の高い学生が集まっている。加えて、毎年辞退勧告制度なども採り入れ DP も含めたさまざまな基準が厳しく敷かれている現状ある。アセスメントに関しても同様であるため、今回、GCI の DP を改定する予定はないことが報告された。

GCI の課題としては、DP ではなく特殊性を兼ね備えたこの全学的プログラムに対する教職員の理解、学内外への浸透がある。

[6] 教学 IR 委員会（上村教学 IR 委員長からの報告）

資料を基に、本学の教学 IR 委員会の現状と DP 再設定と関連した委員会活動および課題等について資料をもとに報告がされた。

- ・ 教学 IR の機能・役割（定義）の確認
- ・ 本学における教学 IR 委員会の役割、位置づけ
 - ・ 内部質保証体制の運営サイクルにおける教学 IR 委員会の役割
- ・ 昨年度の実施報告、課題（入試区分と学修状況調査の分析から）
- ・ DP の見直しに伴う教学 IR 委員会の課題
 - ・ 指標づくり・評価基準→AP,CP との関連付け、開講科目との関連付け
 - ・ 各学部 DP と大学全体 DP との整合性
- ・ 教学 IR 委員会全体としての課題
 - ・ 学習成果の可視化の検討（指標となるアセスメントテストの検討等）
 - ・ 学内のデータ管理
 - 入学から卒業（修了）までのデータ取得、および報告、その背景にあるデータの管理のルール厳格化を推進。そのための規程整備が喫緊の課題。
- ・ 学部によって異なる指標や分析方法等を、具体的に整理し進める。

4. 外部評価委員の講評

1) 菊池重雄先生

DP 作成にあたって教育理念をどう理解するか。そこで自立と共生を強調しているので、この 2 点をどのように各学部が理解しているかが重要である。それに当たるのが玉川大学では全人教育だが、学部によっては、言葉だけが一人歩きしている印象がある。自立は independence なのか、それとも self-help もしくは self-sustainability なのか？それぞれ意

味は異なってくる。また、御校の科目「人間共生論」の中味を知らずに話すとまずいかもしれないが、APにある共生社会という言葉も inclusive society とすると、live together や co-existence ととらえられるとニュアンスが少し異なってくる。そうしたことを各学部で丁寧に分析しているかどうか。理解されてはじめて建学の精神は生きたものになる。

全学の AP にも、深く学問の学芸とあるが、その学芸という言葉のニュアンスがどこまで各学部のポリシーに反映されているか。とはいっても、全体的に 4 学部と GCI の AP は、よくできている、以前のものと比較した際に見えやすくなっているという印象である。

もう一点、可視化にあたってのポイントで、DP のそれぞれの文章で。一文の中に複数の項目がはいっていると、測定する基準が複雑になり、可視化が難しいと思う。また、プログはお金もかかるので、学生の成長をみたときに、卒業時だけをみた場合、そもそも当該のコンピテンシーは入学時点から備わっていたのではないかという疑いも出てくる。ただし全学年で行うとかなりの予算を組む必要がある。

可視化のポイントとしては、定量的にできることと定性的にできることを区別して考えたらどうだろうか。とくに建学の精神を考えると、数字的なポイントで出すよりは、定性的なデータの方がわかりやすいかもしれない。

2) 川島啓二先生

アセスメントに合わせる形で DP を見直すのであれば、それぞれ各学部とも適切に対応されていると思う。ただ、経済界からは Society 5.0 社会において必要とされる能力が求められるなど、外の動きというか、それに合わせた質保証の対応を意識する必要があると思う。各学部がそれぞれ整えるものの、振ってくるものもある。課題解決力がいくつも出てきたが、課題発見力や課題設定力も見ていく必要があると思う。

各 DP については学位プログラム毎に設定するのが原則であり、4 つめだけ枝分かれになっていたものが改善された印象である。

GCI は、学位プログラムではないので、micro credentials に近いものと考え、DP 等の枠組みで考えることが良いのかどうかという疑問もある。さらに GCI のようなものへの academic advising が重要になってくると思われる。

学習成果の可視化とあわせて、世の中の動きに目を配り、柔軟に対応できるように振る舞うのが良いように思う。最近の傾向としては、出口管理として大学に必要な対応が迫られており、入念な目配りが必要と思われる。

3) 杉谷祐美子先生

質保証システム部会にも出ていたりした立場としては、時流も必要だと思うが、あえて原則論に沿って話してみたい。各学部とも大変努力されている。大学の方針も、各学部で検討した上で、あらためて大学の DP を見直すのも良いと思う。わかりやすい内容で、かつ、学士力の類別にそって整理していること、アセスメントと結びつけて検討している努力を評価

する。

ただ、学修成果がどこまで可視化できるかについては懐疑的である。菊池先生の定性的な成果を強調するご意見にも賛同するが、定性的といってもどこまで測定できるか。評価できるものだけを目標にするのはどうかというところもある。

まず、わかりやすく DP を提示しようとしているのはわかるが、学生が4年間にわたって、どの程度の水準まで修得できるのかも考えて検討するのが良いと思う。学生の実態を踏まえたうえでどのくらいの水準が適当なのか、あるいは水準を設定することが望ましいのかを検討することが必要である。

また、目標設定にあたって、いくつかの種類がある。到達目標として獲得しなくてはならないものを具体的に記す方法もある。もう一つは方向目標という考え方がある。最低限これだけと考えずに、方向のみ示す。これは下限、上限が設定しづらいもので、論理的思考力などが該当する。大学教育で目指すべきは、本来はこの方向目標ではないだろうか。

最後に。課外活動も含めて学生は成長する筈だが、授業の中で身につけていくべきものについては、各授業の成績として可視化されるものであって、それが成長実感と結びつくのが良いと思う。学修成果のアセスメントは重要だが、成績との相関を高めて学生がその成績に納得しうることが本来のあり方ではないだろうか。そういう方向での検討が望ましい。

5. コメントを受けて（櫻井隆学長）

自立と共生の理念の下、柔軟に本学として対応していく所存である。文科省、補助金の対処にもっていかうとするのではなく、本学としての方向性を持つ必要があると考える。

以上をもって令和4年度外部評価懇談会が全て終了し、福井副学長が閉会を宣言した。

以上